

# 「勘」の臨床心理学の方法論的意義

—— 涙に関する臨床心理学的研究 (1) 及び (2) をもとに ——

心理学科 上野 轟

抄録：経験的現象学的方法から涙に関するこれまでの研究を通じて、勘が質的な意味分析法に基礎的かつ重要な認識方法として注目されてきた。勘は、人間科学の方法として直観的方法のひとつとして位置づけられるからである。黒田亮によれば、勘は覚=Comprehensionを、竹内によれば、第六感を意味する。勘は、黒田亮の心的立体観 (psychical stereoscopy)、また黒田正典の人のゲシュタルト化された経験の総体の重心にある。筆者は、これを相反し合う経験の統合点にみる。いずれにもせよ、勘は、二分思考法ではなく、統合的思考法に依拠している。こうした意味及び実践の実際からも、勘は、臨床心理学の方法論上有意義で重要な認識方法と位置づけられる。と同時に、なお一層の検討が要請されよう。

キーワード：勘 第六感 経験的現象学的方法

## 経過及び問題

先に「涙に関する臨床心理学研究 (1) — そのコンセプトにかかわって —<sup>1)</sup>」、また「同研究 (2) — 涙が援助的理解関係にとってもつ意味と効用 —<sup>2)</sup>」について経験的現象学的方法から検討してきた。

涙に関するこれら研究は、Kuhn M. H. らの「20 答法」<sup>3)</sup> にならった涙を主題とした自由記述とある事例の涙に関する現象記述が素資料である。この素資料が A. Giorgi らの経験的現象学的方法 (心理学的意味分析) の次の手順<sup>4)</sup> に従って検討された。

1. 全記述に対する全体的感覚・意味をうるため読み込む。
2. 全体的感覚・意味をえ、心理的展望の枠組みや焦点づけられた関心から、意味の分節化をはかる。
3. 記述された人の日常的表現を研究事象からむ心理学的術語に書き換え、そこからなにかの洞察をうる。
4. 記述された人の経験の一貫した表明に心理

学的術語に変換された意味単位を統合し、構造化をはかる。

これら 1 から 4 によって、現象記述の心理学的意味分析が行われた。そして現象記述に流れる文脈にそった検討を通じ、得た意味発見の成果がその研究知見であった。

この心理学的意味分析作業の過程にかかわって、Fischer W. F. は、分析者が当該他者との対人・対話的な共感的かかわり合いをもち、その作業の間主観性を保持すること、また分析者は自由さを保ちつつ、自身によって心理学的リアリティーを構成することを指摘している<sup>5)</sup>。Fischer のこれら指摘は、この意味分析にあたって、被分析者と分析者双方にきわめて示唆的である。

さて、もともと人間の問題にからんで、自然科学的、客観的、説明的で実証的なアプローチと、人間の科学的、間主観的、了解的で意味発見的な体験 (自証) の認識の仕様とがある。経験的現象学的方法は、UFO をみたというとき、UFO があるか否かとの実証的な前者の発想にはなく、UFO をみたという人の心のありように光を当てる意味

発見的な後者の発想に依る。

その際、経験的現象学的方法の意味分析を成り立たせ、その意味発見や全体的な意味構造を把握させ、実らせるのが非合理的で飛躍した精神作用であることはまちがいない。

そこで、経験的現象学的方法の意味分析を展開させる鍵ともいえる非合理的で飛躍的な精神作用に注目する。そして、ここではこの精神作用を「勘」とみ、これを方法論上検討すべき課題として焦点づけることとした。

ところで、ここで主題としようとする「勘」といった精神作用から見て、かねて一般心理学の教科書では夢・想像・創造の章、とくに創造的活動のなかで次のように触れている。「作家や画家の創作などには直観的で具体的な想像力があずかって大きい。また一般に発見・発明の過程は経験や資料が収集され、問題解決のための方法を精魂こめて考え、努力する準備期、その努力が積み重なって次第に発酵してくる潜伏期、そして着想がひらめく靈感期、最後に靈感が機縁となって考えられた仮説についての検証の期という各期を経過してくる。

そして靈感は問題を追求しているときだけでなく、しばしば散歩・入浴といったリラックスしているときなど、問題と全然無関係な行動をしているときに突然あらわれ、ときには夢のなかでひらめくことさえある。アルキメデスが入浴中にかのアルキメデスの原理の着想をえたといわれるのもその一例である。」<sup>6)</sup>

昨今、人間一般に適量の量的アプローチに対して、個人に着目し、これに適う質的アプローチが取組まれてくるようになってきた。量的アプローチである因子分析も最終的には因子の意味づけにある。思うに質的アプローチへの注目は、心理学が究極的に目指し、たどりつく意味の発見にあるといわれることと無関係だと思われない。

その際、質的な意味分析法が提示され、その人の流れとしての文脈が把握、了解と解釈がなされ

ても、その作業に一貫して作用している勘ともいふべき精神作用には必ずしも触れていない。

確かに、勘に関する研究はほとんどみられず、筆者が検索した限りでは、以下に触れる3つの研究所論が見い出されたに過ぎない。

この意味で、質的意味分析研究の基盤をなす精神作用の勘に注目し、吟味・検討を加えることの意義は大きいといわねばなるまい。

## 勘に関する先行研究

ここで第一に黒田亮：「勘の研究」<sup>7)</sup>に触れねばならない。

黒田亮は、勘を心理学のとりわけ日本的（東洋的）研究事象（対象）と見定め、分析を許さない勘という体験=自証を通じて、これの心理学的解釈を試みようするのである。（p. 1）

そして勘にかかわって次のような成果を提示している。

1. 勘は、識（consciousness）ではなく、覚（comprehension）とみる。（p. 9）その際、認識・判断と関連してあらわれる勘と動作及び意志過程で見い出される骨（コツ）に分け、ともに勘と括るのである。（p. 12）

2. 通例の意識は、平面で外から与えられ（p. 94）explicitだ（p. 269）として識と名づける。一方、勘は面に囲まれる深さに成立するとして、これに覚の名を与えた。覚は言外の意味を含み、言説で形容する必要を認めない（p. 257）implicitである。（p. 269）

覚には深みがある。（p. 258）識に意志的加工を施し、深さ（悟り）に入り、心的立体観（psychical stereoscopy）が成立するとする。（p. 94）

3. 覚=勘は図式である。部分をもらさず包蔵し、全体の性質（ゲシュタルト）をもっている。（p. 256）

4. 覚=勘は動的である。自から悟り開く自証

の世界の位置を占めている。大きさはないが、方向に向って展開する。(p. 259) (Ach N. の決定傾向 (p. 81)) しかもその方向性がらせん的な展開をしていく。(p. 273)

5. 覚=勘は識と違って、客観的世界との交渉は間接的であり、遠心性がある。それは識が前哨線に立って活動するが、覚は後方勤務の位置にあるということである。(p. 259)

いかえると、識は自我が直接関与する部分で、覚は自我が統一要件となって、下意識と交渉する部分である。(p. 76)

6. 習慣的動作の成立にみられるように、覚=勘は、識とまたは単独に働くとともに、短縮され、凝固された形で識の代理をする。(p. 260)

7. 覚=勘は快な感じがある。(p. 260)

8. 覚=勘の自我との関係は間接的で、一種の疎隔感がある。(pp. 260~261)

9. 覚=勘の成立には、まず当面の問題に没頭すること、そして全自我を問題そのものに合体させ、そこから忘我に至り、そこから自分の関係ある問題が識野から消える。最終的には、絶体境すなわち覚にたどりつく。この過程は人間的なものから神明的なものへの進展であるといえる。(pp. 285~287)

10. 識は直観(対象を直接に知的に把握する作用)的であるが、覚=勘は非直観的である。(p. 19)

また直覚は獲得性知覚で、間接経験の結果で、宗教は本来直覚的なものである。(p. 37) 直覚は心的活動における内部知覚というべき面があり、(p. 39) 直覚を直ちに覚=勘そのものと全く同じくするとは考えない。日本流の勘の一面を理解するうえで直覚は一助となる。(pp. 50~51)

黒田亮の以上の提言は、覚=勘の次の4つの課題・検討の成果を示している。上記の1, 2, 3, 4, 及び7は勘とは何かを問い、その内実と諸特徴を；5, 6, 8は勘の心的活動における位置づけを問い、客観的世界、意識・無意識及び自我との関係を；

9は勘の成立を問い、その過程を；そして10は勘に関連する諸概念との類別を問い、直観や直覚との関係をそれぞれ示している。黒田亮は、こうした覚=勘を剣法の極意、学問や芸道の極致や奥義、また禅の悟りなどの事例を通じて上の提言の明証をはかってくるのである。

次に黒田正典が「心の眼」<sup>8)</sup>、のなかで触れている勘についての所論に耳を傾けてみよう。

黒田正典(前の黒田亮とは縁戚関係にはない)は、黒田亮の「勘の研究」を心理学の対象とした視点が不明確だと批判しつつ、(p. 53) その解明について評価し、その成果を紹介・援用している。

その際、黒田正典は勘の解明視点について次のように述べる。勘は科学的認識と対置する認識法のため、心理学の対象とはなりえないとし、(p. 53) 勘の解明視点は現象学的方法にあるとみるのである。(p. 54)

黒田亮の「勘の研究」<sup>7)</sup>に対するこうした批判について、筆者は黒田亮が勘の解明に当って、暗々裡に黒田正典と同じく現象学的視点に依っていたと思われる。勘の体験=自証の記述が分析法によらず、直覚的(comprehensive)であることに依ったからである。黒田亮は言う。「独特な表現をもっていたため、普遍性を欠くといわれようが、自己の体得したある普遍的なるものを表現しようとした(本質直観)」。((7)のp. 3) このことは現象学的視座を指し示している諸学の確実な基礎をすえるため、一切の先入見を排し、日常のみ方の土台にある外界の実在性について判断中止する。そのあとに残る意識に直接に明証的に現われている現象を直観し、その本質を記述・検討・意味構造をはかるとの意味を伝えているからである。

ちなみに、現象学的視座からの黒田正典の勘の解明が、黒田亮の研究成果を援用し、ほぼ同義の成果を導いていることは見逃すわけにはいくまい。

さて、黒田正典の現象学的視点からの勘の解明成果に触れていこう。

1. 勘は無形のものを見る心の眼である。(p. 13)

勘はなんらかの方法で文字で表現できない。また知識だけでは実行できない。

2. 科学研究は、研究者（認識主観）から独立した研究対象のすがたを認識するところにある。（p. 56）これに対して、勘は認識主観（主体）と対象（客体）との間に距離がなく、主体の全体が客体の全体と接触している。（p. 56）

3. いま指先で棒を立てる勘（骨）を例示しよう。このとき手と棒の接触点、つまり指先の触覚には棒の重心がかかっている。触覚に棒全体の重みが代表される。その重みは腕の重心を経て、身体の重心にかかっている。勘では接触点が全体を完全に代表している。（pp. 56～57）

このように、運動する主体に衝突する接触面には、主体全体の運動傾向がすべて伝達される。（p. 51）このとき主体と客体＝主体に短時間に反応伝達が行なわれ、（p. 62）その接触面にひらめく火花・音のところに勘が生ずる。（p. 60）いいかえると、勘は部分部分がバラバラに動かず、主体としての統一から浮き立って来て生ずる。（p. 58）

4. かくして、勘の能力は無数の経験の痕跡が圧縮されるところにある。また勘は重心という一点に圧縮されて生まれる。（p. 60）まとめていえば、勘は目指す認識または行動に必要な多くの条件をゲシュタルト化してまとめ、重心に圧縮するところにある。（p. 64）

以上、黒田正典の勘の解明は、前の黒田亮の勘の解明に同意しつつ、ほぼ同義のすがたを描いてきている。そのなかで黒田正典は、今日的時代背景のもと、わかりやすく伝え、勘どころが認識または行動に必要な多くの条件をゲシュタルト化し、これの重心に圧縮することを明確化してきたのである。

勘にかかわる先行研究の最後に、生理学者で医学史学を講じている医学者竹内芳衛：第六感<sup>9)</sup>、に触れておきたい。

竹内芳衛は、黒田亮の勘の研究を日本ならではの

の感覚と位置づけ、その研究成果を高く評価している。

そして竹内は勘を第六感と同義とみている。（p. 187）科学的方法には合理的方法と直観的方法とがあるが、第六感は後者に当る。（p. 324）直観的方法は主観的でかく批判され、研究に当たらないとみなされてきたが、勘（第六感）は科学的知的活動の胎種である（p. 314）と重要視している。

第六感は職業意識で自己修練し、そなえられる直覚能力で即座に全体をつかむ（pp. 129～130）のである。第六感<sup>かん</sup>は感<sup>かん</sup>：感じさ<sup>かん</sup>とる；関<sup>かん</sup>：かか<sup>かん</sup>わりをもつ；鑑<sup>かん</sup>：照らし見<sup>かん</sup>分ける⇒感<sup>かん</sup>＝勘<sup>かん</sup>となるというのである。

黒田亮は勘と骨とをほぼ同義とみなしている。しかし、竹内は勘と骨とは少し違うとみている。骨は、技術的で意志動作の習熟に伴う特殊な体験事実をいう（p. 184）。勘は、その場合骨を骨たらしむる洞察性を主な性格とする（p. 185）。いいかえると、勘は骨を行わしめる支配性と、骨の体得に至る整備的役割をもつ（p. 185）というのである。

ちなみに、蟲の知らせの場合は、消極的に何かを示唆されて一定の事柄——専ら凶事のことが多いが——を知らしめるが、勘はあくまで積極的で能受的である（p. 186）と見分けしている。

さらに、直観は帰納的に働らく感作用である（p. 131）。第六感<sup>かん</sup>は勘<sup>かん</sup>違いであるか否か、その確実性は普遍性にかかわっている（p. 130）。その際、その確実性を検討し、実証することが必要となろう（p. 133）。

最後に、勘は生理学でいう反射反応様である（p. 335）が、反射反応ではない。（p. 339）その中枢は間脳（勘脳）にあり、前部の運動機能（p. 350）と後部の情緒整調機能（p. 352）とを綜括する機能に局圧的な関係をもつ（p. 354～355）との見解を示している。

なぜなら、次のところに微妙なる勘の意義がみ

とめられるからである。人は大脳があって感覚し、思考し、記憶し、自我の主張をもつ。それゆえに感覚を感覚として感覚を越え、思考を思考として思考を越え、記憶を記憶として記憶を越え、自我を自我として自我を越える（p. 341～342）ところにあるからである。

以上、竹内芳衛の第六感について触れてきた。その所論は、黒田亮のそれと、骨を除いて、ほぼその成果を同意・踏襲しているように思われる。

ただ竹内は医学、とりわけ生理学の立場を反映してか、勘を第六感と同義とおき、勘は奥ゆかしく深みがあるのに対して、第六感は浅薄でがさつと語感的イメージを述べ（p. 187）、黒田の立場に敬意を払っているかのようなのである。

竹内は第六感を科学的活動の胎種と位置づけ、その生産的意義を唱えている。そして第六感（勘）は職業意識の自己修練でそなえられた直覚能力とした。そして、その中枢を間脳という意識を支える意識下におき、運動機能と整調機能とを綜括する機能に局在的な関係を持つと推察している。この見解は、黒田亮の心的立体観や、黒田正典の重心の生理学的機序を提供しているものとみられる。

最後に、竹内が黒田亮の勘を第六感としたその立場とエッセンスを本著冒頭に掲げられている頌歌に託して伝えているように思われる。

#### 頌歌

- 一) われは見えざるものを視る眼  
 われは聞えざる音を聴く耳  
 われは勾なる勾を嗅ぐ鼻  
 われは触れ得ざるを触れる手
- 二) 視んと欲すれば全身これ眼  
 聴かんとすれば全身これ耳  
 触れんとすれば全身これ手

鉄壁の堅きは貫くに難く  
 蒼海の深きは到るに難く  
 天空の高きは達するに難くも

自在神力われに在り  
 七洋を一瞬の間に呑み  
 刹那に天涯の際を究む  
 われは神変不思議の術者

一度無感の感を馳せ

離見の見を以て照せば  
 一花開いて天下の春  
 一葉落ちて天下の秋

- 一) くりかえし  
 二)

われこそ神変自在の主

#### 筆者の勘\*に関する所論

上に、両黒田の勘及び竹内の第六感に関する所論に検討を加えてきた。この検討作業を通じて、勘の解明に当たって次の論点が導かれてきた。

第1は、勘が心理学の対象か方法かの問題である。黒田正典が黒田亮に批判しているように、勘は心理学の認識の一仕様であり、この意味で、その方法論に位置づけられよう。その際、ここでは勘が対象か方法かとの二分思考法から方法論に位置づけたわけではない。そこから対象か方法かの果てしない循環論に陥いるのを避けるからである。

心理学はもともと認識論でもあるといわれる。その認識の一仕様である勘は、方法論上吟味・検討すべき論点であることはまちがいない。いいかえれば、勘は人間の主観的で主体的な精神の営み

※ここでは骨・第六感・勘を含め勘と括って表記することにする。

であり、融合・統合的思考法すなわち現象学的視座によって光が当てることができるのである。もっといえば、経験科学としての心理学で、勘は経験的現象学的方法に位置づけることができる。前に触れたように、勘は経験的現象学的方法を成り立たせ、展開さす基盤であるように思えるからである。

第2は、勘にからむ親戚関係の諸概念の整理の問題である。黒田亮は、勘にからむ直観や直覚等の諸概念を類別・明確化する吟味を検討している。一方、黒田正典はこうした類別吟味の作業は必ずしもなされず、同義的に併用しているようにみえる。また竹内は生理学の立場で第六感に括って論をすすめている。

ここで、筆者は勘にからむ親戚関係の諸概念を経験的現象学的視座から、勘を構成する多側面と位置づけ、多側面を総括し総称して勘といい、次のような整理を試みた。

1) 勘が成立するプロセス：両黒田及び竹内とも、冒頭インスピレーション（靈感）がわくと同様なプロセスが要ることを明らかにしている。ただし、インスピレーション（靈感）や宗教的心性には自我疎隔感が伴うことも共通に指摘している。

2) 勘を生む生地・センサー：勘には上の1)のように、ある面で意志的努力が要る。これに加えて、勘を生む生地やセンサーに当る感性また対人・対話関係における感受性といった属性が関与していることが推察される。このことは勘を竹内のように第六感と呼ぶことをみることに証拠だてられよう。

3) 勘が生まれる舞台：両黒田とも、勘が生まれるのは前意識ないしは無意識から意識に覚醒されることを指摘している。生理学者竹内は勘が生まれる舞台を間脳にみとり、両黒田の見解を生理学的に根拠づけている。

4) 勘それ自体：勘それ自体は認識の一仕様であって、黒田亮が言う心的立体観（psychical stereoscopy）、黒田正典が言う形態化されたもの

の重心（バランス点）を指す。黒田亮の心的立体観をいえば、丁度左右各眼の視差をひとつに融合・統合する点＝立体視の成立にたとえることができる。この意味で、勘それ自体は輻輳点であり、バランス点であるとみることができる。竹内はしみじみこのバランス点を間脳の運動機能と整調機能の統合する機能に局在的な関係を持つと指摘している。

5) 勘を勘たらしめる精神作用：黒田亮は勘を直観と区分けし、直覚に入れる。黒田正典はこうした区分けが不明確なまま、ほぼ同義に使っている。筆者の考えでは、勘を勘たらしめる精神作用は、それこそ感覚的にいえば、直感や感知力がフィットするもののように思われる。勘が二分思考法になじまないゆえ、静的な知的性質よりもむしろ融合・統合思考法がなじむゆえ、動的な情意的性質が濃いと考えるからである。

6) 勘という点が定位され、開られる世界：両黒田とも勘＝覚とみなしている。筆者はこれを覚が勘という点の定位とそこから開けられる世界とみなす。従って、洞察や気づきまた悟りという世界を意味しているものと考えてのである。将来展望を入れるとき、予感という世界に広がっていくのであろう。

最後は、上に記してきた勘を構成する多側面を統合する人格論が求められてくることがある。実際、両黒田とも勘にスポットを当て精査しているが、その枠組みとなる人格論が背景に遠く退いてみえてこない。

黒田亮が宗教は本来直覚的なものである（(7)-p. 37）と提示したこと、また竹内が勘の生理学的メカニズムに間脳をおいてみたことにかからみ、宗教（筆者の宗教的心性）にも組み込み、中枢神経系の構造をモデルにした Rothacker E. の人格の成層論<sup>10)</sup>を勘の統合的枠組としての人格論と注目とした。

Rothacker E. によれば、「人間は身（生命層）と心（人間層）と精神（高層）の統一体の存在で

ある」(p.2)という。そして宗教にかかわっていると、「人は全く新しい考えが急に浮かんできたとき、インスピレーションが与えられた自我—疎隔感を感じ、これを神によると感じられる」(p.173)。こうした宗教的心性といった「高層構造は自我による内的感知によって呼びさまされた意識と覚醒という特殊な機能によってつくられる。」(pp.93~94)「それは生命層(下層)の感情とも共感し、感じ尽す独立した機能によって行なわれる。」(p.102)

Rothacker E. の上の所説から、宗教的心性は身—心—精神の統一体という精神構造に自我の内的感知による気づきから生まれ、下層の感情と共感し、統合された心性であるとみるのである。その際、宗教は下層を克服し、高層の究わみを志向するとすれば、宗教的心性は宗教へ結晶化する基盤を成すように思われるが、むしろ人間の実存により近いように受けとめられよう。

この意味で、身—心—精神の統一体という人格構造のもと、自我による内的感知に第六感=覚=勘をみる。そして勘をひらめくのは人間の自覚存在としての実存というあり方にあると位置づけることができよう。

### 「勘」—臨床心理学の方法論的意義

臨床心理学の方法論は、基本的に自然科学が依拠する二分思考法(客観的方法)にはない。人間の科学としてむしろ融合・統合思考法(現象学的方法)に依拠するところにあると考えられる。臨床心理は、人が構成してくる人とのかかわりやその生活の現実が舞台となるからである。

実際、「人は生活の現実でたとえば「近づく」「遠ざかる」に代表される事柄的で外見可能な空間にいつも生きている。と同時に「近しさ」「疎遠さ」に象徴される体験の意味で外見不能な空間においてもいつも生きている」<sup>11)</sup>。こうして人は、両空間を生活の現実のうちにひとつに融合・統合

し、両者を一挙に生きているからである。

そこで、経験科学としての臨床心理学が人間の科学としてその方法論に経験的現象学的方法を適用することは至当であろう。その際、この経験的現象学的方法を成り立たせ、展開させる基盤が勘にあるとき、方法論上(認識上)きわめて重要であるといわねばなるまい。

さて、勘に関する検討を通じて、勘は身—心—精神の統一体という人格成層構造に主体的自我による直感・内的感知(覚)と把らえられる。それはゲシュタルト化された経験総体の重心あるいは心的立体観と解明される。そして、勘をひらめかせる実存というあり方が明確化される。その際、重心あるいは心的立体観を筆者は両眼の視差の融合・統合による立体視の成立(相反し合う両極の融合・統合)にたとえて記してきた。

このようにみえてくると、経験的現象学的方法と勘とが依拠する思考法がともに融合・統合思考法に奇しくも一致することに関心がひかれる。勘が認識の一仕様として現象学的視座に依らないと解明できないことの黒田正典の指摘も了解されよう。

既述のように、勘のいわば勘どころが心的立体観あるいは重心、筆者の相反し合う両極の融合・統合点にあるとき、重要なのは、みるでたとえるなら、みえていないことがみえてくることにある。黒田亮が comprehension という所以でもあろう。

前にあげた生活の現実で例示するなら、人はとかく事柄的なみえる空間に確信をおき、安心する傾性がある。しかしみえる空間と意味体験のみえない空間とがその人格のうちにひとつに融合・統合するなら、そこからみえない空間のことがみえてくるようになる。異性間で事柄的に近くにいるから必ずしも近しいわけではない。遠く離れていても近しいことだってあり、その見分けができるのである。それはあたかも交感神経と副交感神経とがひとつに融合・統合して自律神経となり、生体のホメオスターシスを成立させる如くである。このようにそこから新しい意味世界の発見が開ら

けてくるのである。

思うに、心理臨床で出会う人は、その生活上で相反し合う両極—たとえば好きな自分（+）と嫌いな自分（-）—に直面すると、その心理的傾性も加わり、とかく二分思考法に陥りがちとなる。そこでは、あれかこれかの選択に迫られ、苦悩を抱えざるをえない。こうした苦悩を苦悩し尽すプロセスで、相反し合う両極をその人格のうちにひとつに融合・統合するとき、勘がひらめき、苦悩という闇に（-の自分）一条の光を（+の自分）を発見し、洞察・気づきをえ、闇があって初めて光が光としての意味をもちうる新しい意味世界の発見を開らいてくる。この世界の発見は、人が生きる真実という原点への回帰—これが臨床心理学が目指す人間としての健やかさである—を指しているやに思われる。このことは文献2)の事例によっても確証されよう。

このようにみえない時空である人の内面的意味体験の世界は、心理臨床にたずさわる人の融合・統合思考法の視座からの勘によってみえるようになるのに違いない。

その際、人が構成する現象にあるがままにという認識の仕様は、まさに融合・統合思考法の視座の具体化にある。それは共感的理解に代表されるように、人の援助的理解につながってくる。また文献2)で示した感情の定理（肯定感情であれ否定感情であれ、これをあるがままに受けとめるならいづれも肯定感情になる）は、感情の特性というよりもむしろ主体的作用の勘に当たるといえよう。

このようにみえてくると、勘は人の理解とその援助に鍵の意味をもっている。この意味で、勘は心理臨床の実践上重要かつ有効である。今後心理臨床の実践を通じて、この勘の育ぐくみが検討されるべき課題となろう。

## 文 献

- 1) 上野 蘆：2004, 涙に関する臨床心理学的研究（1）—そのコンセプトにかかわって、大阪樟蔭女子大学学術研究会人間科学研究紀要, No. 3, pp. 49~55.
- 2) 上野 蘆：2005, 涙に関する臨床心理学的研究（2）—涙が援助的理解関係にとってもつ意味と効用、大阪樟蔭女子大学学術研究会人間科学研究紀要, No. 4, pp. 63~74.
- 3) Kuhn M. H. & McPartland T. S.: 1954 An empirical investigation of self-attitudes, Amer. soc. Rev. 19, 68~76.
- 4) Giorgi A: 1985, Sketch of psychological method, Giorgi A. Edt. Phenomenology and Psychological Research, Duquesne Univ. Pr. pp. 8~22.
- 5) Fisher W. F.: 1989, An empirical-phenomenological investigation of being anxious—A example of the phenomenological approach to emotion, Valle R. & Halling S. Edt. Existential-Phenomenological Perspectives in Psychology - Exploring the Breadth of Human Experience, Pleunum Pr. pp. 127~136.
- 6) 北村晴朗編：1960, 一般心理学演習, 誠信書房, pp. 146~148.
- 7) 黒田亮：1933, 勘の研究, 岩波書店.
- 8) 黒田正典：1963, 心の眼, 協同出版.
- 9) 竹内芳衛：1942, 第六感, 畝傍書房.
- 10) Rothacker E. (北村晴朗監訳)：1955, 人格の成層論, 法政大学出版局.
- 11) 荒井洋一：1982, 私はどこから来たのか, 私はどこへ行くのか, 東京学芸大学哲学研究室編, 自我, 大明堂, pp. 37~41.



# An empirical phenomenological investigation into 「the Kan」—Through previous studies on tears (1)～(2)

Osaka Shoin Women's University  
*Hitoshi* UENO

## ABSTRACT

Through previous studies on tears from the view-point of an empirical phenomenological investigation, it is noticed that the Kan (comprehension by Ryo Kuroda) seems to be the fundamental and important way of the qualitative meaning analysis.

The Kan means comprehension by Ryo Kuroda, or the sixth sense by Yoshie Takeuchi. At the time, psychical stereoscopy by Ryo Kuroda, or the balance of a form of one's total experience by Masasuke Kuroda constitutes the Kan. By author, the Kan consists in the integrative way of thinking. In other words, the Kan is created through the unity of the antagonistic relation between the two experiences. It follows from this that a negative experience is darkness that serves us as a background against which we see the light.

From the above-mentioned investigation, the Kan seems to be a significant and important way of thinking or cognition in the clinical psychological practices. Accordingly, the Kan has to be much more investigated from now.

**Keywords:** The Kan, The sixth sense, An empirical phenomenological investigation